石川県立看護大学
ISHIKAWA PREFECTURAL NURSING UNIVERSITY

IpNU キャンパスネット

2003.3 MAR. Vol.3

『なのはな』
木版画／谷内（たにうち） 正遠（まさと）（津幡町在住版画家）

目　次

大学の主な動き	2～4
第３回入学式	2
国際交流	2
オープンキャンパス	3
フィールド実習	3
大学祭	4
球技大会	4
まなびピア（第14回全国生涯学習フェスティバル）	4
講座・領域紹介	5
成人・老年看護学講座	5
基礎看護学講座	5
キャンパスライフ	6～7
大学生活この一年	6
まなびピアに参加して	7
実習をとおして	7
図書館から	8
地域ケア総合センターから	8

石川県立看護大学
ISHIKAWA PREFECTURAL NURSING UNIVERSITY

看護学部　看護学科

〒929-1212 石川県河北郡高松町字中沼ツ7番1
TEL 076-281-8300 FAX 076-281-8319
URL http://www.ishikawa-nu.ac.jp
E-mail office@ishikawa-nu.ac.jp

大学の主な動き

第３回入学式

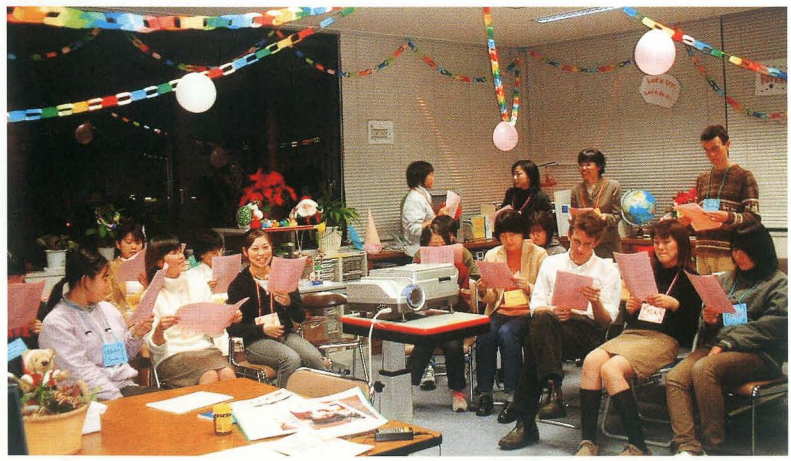
平成14年４月８日（月）に、本学講堂において第３回入学式が行われ、94名（女子90名、男子４名）の皆さんが気持ちも新たに入学されました。新入生を代表して松本由佳さんが宣誓、金川学長は「看護職は人と人との関わり合いが基本であり、知識、技術の習得に加え、感性の豊かな人間性を養って欲しい。」と訓示されました。谷本正憲知事が「新しい時代の健康福祉社会づくりの一翼を担うことを期待しています。」と挨拶、来賓の高畠秀雄後援会会長から御祝辞をいただきました。

国際交流

国際交流活動進行中
－ワシントン大学看護学部との学術協力協定締結

「国際交流の集い」と題した催しが、国際交流委員会の企画で、年間を通して定期的におこなわれています。平成１４年度は、学生や教員の海外留学・研修体験の発表会をはじめ、英語を母国語とする方を招いた英語を親しむ会、石川県在住の外国の方々を交えたクリスマス会等が実施されました。また、学生達の熱い要望に応えて、新たに「English　Break」と題する企画も誕生し、学生が英語と親しむ機会がさらに増えました。

国際交流活動における大きな前進としては、平成15年３月31日にワシントン大学看護学部と石川県立看護大学との間に学術協力協定が結ばれることです。今後はこの協定を積極的に活用して、学生短期海外留学プログラムやワシントン大学看護学部の教授の招聘といった企画を実行していくことにより、さらなる飛躍を試みたいと思います。



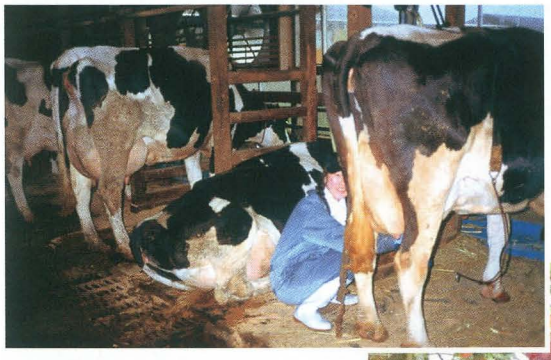
オープンキャンパス

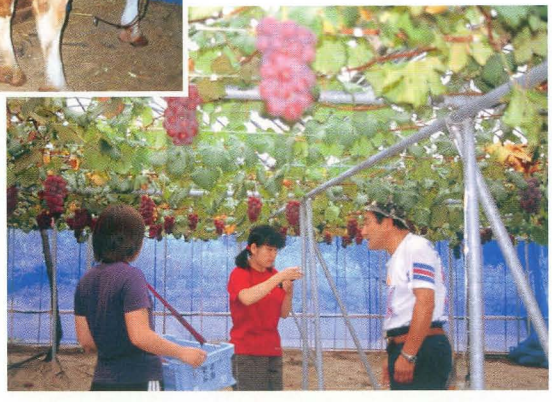
高校生等が本学に体験入学するオープンキャンパスは、平成14年７月21日(日)に行われ、前年を上回る約200名の参加がありました。大学概要・入試情報の説明後、学内を見学し、午後からは公開授業の講義を聞いたり、演習を体験したりと看大生の気分を味わった１日でした。

フィールド実習

フィールド実習は１年生と編入生および全教員が関わる、入学後最初の臨時実習である。目的は「社会に生活し、職業人として働いている人たちの日常に触れ、様々な生き方や考え方について身をもって学び、人間を生活者として全人的に理解すること」である。したがって、看護学実習の施設とは異なる一般の人が働いている場所が対象である。毎年、７月上旬の２日間を実習日としているが、実際は受け入れてくださる施設の事情で６月下旬や夏休み期間中となることがある。その前段階として学生自身がテーマを決め、フィールドを選択する。学生３～４人のグループを１人の教員が担当して、事前の学習やフィールド（施設や場所）との連絡調整について指導するが、主体はあくまでも学生自信である。学生たちは参考図書やインターネットで検索し、それぞれの関係者に目的を説明して実習受け入れを要請した。

これまでにお願いして出かけた施設は旅館、結婚式場、郵便局、警察署、消防署、水族館、動物園、浜茶屋、牧場、製菓業、酒造業、農場、陶芸館、テレビ局、自衛隊、自然保護センター、給食調理場、花火工場、市場、災害救助犬団体などさまざまである。学生たちはそれぞれの場所で実りある体験をし、学んできた。共通しているのは職業への誇り、チームワークの大切さ、相手への思いやりなどで、看護の基礎となると受け止めている。





９月の全体報告会で成果を発表し、報告書の提出とともに自己評価が求められる。この実習を通して、学生自身は視野が広がり、人間として成長したと考察しており、専門の看護学実習が始まる前に行われるフィールド実習は十分に目的を果たしていると思われる。

大学祭

平成14年11月２日～３日に第３回の看大祭が開催されました。今回は「ＰＯＷＥＲ☆ＵＰ」をテーマにライブ・ダンス・模擬店等、多彩な企画が催されました。２日目には看大祭らしく、献血のボランティアも実施され、多数の参加がありました。地元高松町の方々からもたくさんの御協力をいただきました。

球技大会

開学記念日の５月29日には学生・教員対抗のソフトボール大会、６月29日には学生対抗（教員チームも参加）のバレーボール大会が開催され、どちらも学生のチームが優勝しました。

まなびピア（第14回全国生涯学習フェスティバル）

第14回全国生涯学習フェスティバル（まなびピア石川2002）が平成14年10月10日から14日までの５日間、石川県産業展示館を主会場に開催されました。本学も「かがやき発見ゾーン」にブースを出展し、数多くの県民の方に来訪いただきました。日替わりで、骨密度計・血圧計等を使用した健康相談、エアロバイクを使用した基礎代謝測定、マイベビーちゃんをとおしての育児体験、のコーナーを催し、そのどれもが好評を博しました。11日には秋篠宮同妃両殿下もお越しになられ、数あるブースの中から本学のブースにお立ち寄りいただき、予定時間を上回るほど熱心に御視察いただきました。

講座・領域紹介

成人・老年看護学講座

後列左から角田美穂助手、相川奈津子助手、高道香織助手、細川淳子助手
有田広美助手、城戸口親史助手
前列左から丸岡直子講師、天津榮子教授、水野道代助教授、佐藤弘美助教授
江本厚子助教授、村井嘉子講師

成人・老年看護学講座では、成人看護学と老年看護学の分野に関する教育と研究、および地域への貢献をめざした活動を行っています。教員は、成人看護学８名、老年看護学４名の計12名です。

成人看護領域では、青年期から60歳代前後の幅広い年代の人々を対象に、成人期の特徴、発達課題を理解し、健康上の問題が人々に及ぼす影響や、健康問題をもつ人々とそのご家族への看護の役割と機能を考えていきます。

学内の講義・演習では看護援助に必要な理解・知識・技術・実践的な思考プロセスを学習します。臨地実習では、病院・入院している人々とそのご家族との関わりを通して、対象理解を深め、看護の実践能力を養います。

老年看護学では、自分たちよりも遥か前を生きてきた「高齢者に近づく力」を育てることを主眼におき、楽しく豊かに学べるような内容でいっぱいです！

老年看護学概論では、高齢者の存在の意味を考え、高齢期に特徴的な発達課題と健康問題の概説をし、老年看護方法論Ⅰ・Ⅱでは、高齢者との語らい、グループワークでの事例展開、フィジカルアセスメントや郷土食づくりなどを行います。老年看護学実習では、概論や方法論で培った「高齢者に近づく力」を実践でフルに発揮して、受け持ちの“高齢者の看護”を実践しています。

選択科目では、痴呆性老人ケアが開講され、卒業研究では、老年看護に関するさまざまな課題に取り組んでいく予定です。

後列左から川島和代助教授、滝内隆子助教授、佐々木榮子助教授、小松妙子講師
前列左から金若美幸助手、田村幸恵助手、木村久恵助手、中山栄純助手

基礎看護学講座

基礎看護学講座は本学の専門領域の中で、「看護の基本」を教授する分野です。看護の専門領域としては一番最初に学生に向き合い、真っ白な学生に少しずつ看護の考え方や知識・行為が身につくよう一緒に学ぶ分野ともいえます。看護学原論、基礎看護方法論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、基礎看護学実習Ⅰ（１年次）、基礎看護学実習Ⅱ（２年次）を担当しています。教員は９名（うち１名は老年看護学教授が併任）で個性豊かな布陣です。特に基礎看護方法論では、基礎看護学実習室をフル活用し、小グループ編成にした学生に対して、全教員が授業にのぞみ、講義と演習を一体化した展開を行っております。

80名余が一斉に演習を始めると騒然とした（いや、熱意溢れる）授業と化します。教員も四方八方に分散して所狭しと動き、学生の一挙手一投足に目を凝らし続けています。基礎看護学実習室だけでは場所が足りなく、時には他の分野の実習室も活用してどの学生にも等しく演習が体験できることを重視しています。実習室は朝8:30から19:00までは開放し、学生の自主的な学びを支援し続けていますが、熱心な学生は早朝から夕刻まで空いた時間を使って技術の習得に余念がありません。入学時はベッド一つ整えることが出来なかった学生が、ピンとシーツを敷くことが出来、個別性を考えて工夫した清潔への援助ができるようになったり、緊張して何も聞こえなかった聴診器で安定して血圧測定できるようになってくると本当に嬉しくてたまりません。

学生たちがまだ出会わぬ患者様や地域の人々を思い描いて、自分の看護を提供できるよう自主的に頑張っている姿がたのもしく、その成長をともに喜びたいと願っている教員たちです。今年もまた、看護への意欲に溢れた学生達との出会いを期待し、どんな輝きを見せてくれるのか楽しみにしてます。

キャンパスライフ

大学生活この一年

1年　長谷川　敦　子

この大学での学生生活一年間を振り返ると、大変学び多き一年だったと思いました。看護大学ということで、目的意識をはっきりと持った学生が集まる中での「看護」という講義の学びは大変充実していました。

私が大学生活の中において、一番成長できたと実感することができたのは、大学祭の実行委員をやり終えたときでした。大学祭は、１・2年が中心となって運営しました。あらゆる部分において２年生の先輩方に頼りっぱなしでしたが、　大学祭にむけて準備を進めていくうえで、仲間との反発や、やる気だけが先走る空回りな行動、葛藤など様々な感情を抱きました。しかし、多くの苦悩から大学祭を成功することができたときに、仲間と共に感動という他の何物とも比べることのできない感情を体験することができました。

この大学に進学し、良き仲間と出会えたことが大変嬉しいです。大学祭では、仲間の大切さを学ぶことができ、また、団結力という言葉の意味を心から理解することができました。これから３年間、この大学において学生らしい学びをしていきたいです。

3年　小　泉　早　苗

早１年。時の流れの速さを感じている私は、看護師として働き再び学生となった。なぜ、大学に進学したのか。それは、自分自身の中に答えが欲しくなったからかもしれない。臨床は慌しく、答えを見つけられないまま過ぎ去っていく。足を止め振り返ることが出来るのは、深夜勤務帯の先輩相手に語る時と、部屋に戻り一人になった時であった。　経験を積むことで、専門性を深め看護の組織に馴染んでいく。しかし、病を見ることに慣れすぎた私は、人を看ることに鈍感になっていたのではないだろうか。人は様々な顔を持つ、そんな単純な事実さえも見えなくなっていた。自分の看護はこれで良かったのだろうか。

さて、その答えは一年たった今でも分からないでいる。入学したばかりの頃、私は答えを求めてばかりいた。ある日先生から、「もっと肩の力を抜いてごらん」と話された。その言葉で、自分は自由になれた気がする。答えを求め入学した私であったが、少し考え方が変化してきている。答えは、看護師を辞めるその日が来ても分からないかもしれない。今はその通過点であり、考え続けていく姿勢が大切なことのように思う。学生生活は、看護にとらわれることなく新しい発見と知識を与えてくれた。仲間達と話すことで狭くなっていた視野が広がり、自分の固くなった発想力に気づく。大学から発信される情報を下に、学会や講演会を聴講し看護の新たな可能性を知る。看護の場は、無限大に広がる。その可能性を楽しみにしている。

3年　篠　原　宏　実

病院にいると様々な人の生死に出会う。「人間は生きてきたように死ぬ」というが、その人らしく生きること、そして死ぬことは、本当はとても難しいことなのではないかと感じることがある。苦痛は本来のその人を変えてしまう。　それは、一見健康に生活を送っている私達でも、入院し死に瀕している患者様でも同じことだ。看護師、保健師の仕事は、人々がそんな苦痛を味わうことを予防したり、取り除くことができる仕事だ。身体的な病気を治すだけでなく、その人の人間らしさを引き出したり、取り戻すことのできる仕事だと思う。少し傲慢かもしれないけれど、時には私達医療者との出会いが、ある人の人生を変えてしまうことさえあると感じている。そんなところにやりがいを感じずにはいられないのだが、実際に現場で働いていると、忙しさにまぎれてこの仕事の素晴らしさに影が差すことがある。この大学に入り様々な先生、学生の皆さんと出会い、「看護」について学び直したことで、その影が取り除かれ、また人と深く関わる仕事がしたいという気持ちが磨かれた。その気持ちを新たな職場で十分に生かせるように、残りの学生生活を有意義に過ごしたい。

まなびピアに参加して

3年 澤瀬　望

まなびピアでは、私達が大学でどのような事を学び、それぞれの感性を磨いているのか、その一部を学生と教師が会場に訪れた人々に触れ合うことで広く知って頂くことが出来たのではないかと思います。そして私達が説明、実施したことに対する訪れた方々の眼差し、驚きの表情・笑顔…それらの一つ一つは私にとって、とても新鮮でした。

今までは看護学生として、入院されている患者さんと接していくことが主であり、このような形で人々と触れ合う機会は無かったので、このまなびピアを通して様々な世代の方々と触れ合い、その一人一人の方に今まで体験したことのないことを体験して頂くということに携わる事が出来、素晴らしい経験になったと思っています。また、今までとは違った視点で「人」を捉えることが出来、視野が広くなったように感じます。

私は看護学生としてこれからも様々な人と出会い、多くの時間を共有し、そして何らかの影響を与える存在となっていきます。ですから、この経験を通して、これからも私が関わる人々、その人が過ごす時間の中に関わる一瞬一瞬を大切な時間とし、良い影響因子となることが出来るように豊かな感性を磨いていきたいと感じています。

実習をとおして

1年 村田千織

私は小さい頃からの入院経験を経て、看護の道に進みたいという希望を抱きこの大学に入学しました。私の中で看護大学のイメージは入学してすぐに１年の間から注射などの技術を学ぶというものでした。しかし、「看護の定義」や、人体の構造や機能などの講義が始まったので、病院の中で見てきた看護師が行っていたことと違い、どうして技術的な勉強をしないのだろうかと不思議でした。でも今改めてふり返るとその看護の土台がないと本当の意味での看護ができないのではないかと思うようになりました。この大学の授業進行は講義より「耳」で学び、先生方のデモンストレーションにより「目」で学び、それを私たち生徒が実際に体を使い行う事で人間の五感をうまく利用するもので、とても習得しやすく生徒にとって適当なものだと思いました。またこの大学の１学年の生徒数が少なく、クラスがあるということで生徒間の友好関係が深めやすく、友達ができるかどうかという不安もすぐになくなりました。先生方とも授業を通してのふれあいや意見交換によってとてもいい関係を築くことができ、信頼して相談できる存在にもなりました。

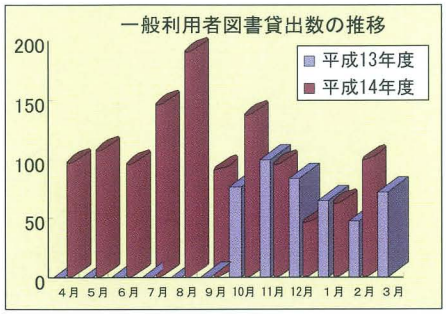
この１年で私の中で一番印象深いのはやはり秋の老人ホームでの実習です。私の実習先は痴呆棟であり、今まで痴呆老人と接することがなかった私は、何を話せばいいのだろうか。どのような接し方をすればいいのだろうかという疑問とともに授業や放課後に練習した技術面での成果がだせるのだろうかという不安でいっぱいでした。しかし、実習が始まると、この不安がよい緊張感に変わり日常生活との切り替えがしっかりとできたと思います。実際に入所者の方々に接していくと、私が実習前に持っていたイメージと違い、しっかりと自己表現でき、一般のお年よりの方々と変わりがないのを見て、今までの考え方が間違っていたことに気づき、先入観をなくして、接していくことが重要だと知りました。また、先入観をなくすことで、入所者のありのままの姿を見つけ出し、１人の人間として尊重することができ、そのことによってその人のニーズにあった看護が提供できることを学びました。この実習ではまた人の温かみが人の不安をやわらげ、幸せにする力があると多々感じることがありました。こうしたことから看護は温かみを持つ人間であるからこそできるものだと感じ、今後看護を学んでいく意欲にもつながり、一生忘れられない実習となりました。

こうして振り返って見るとこの一年間はとても早く過ぎ去ったように思います。しかし、その中身はぎっしりと私自身の中で蓄積され、今後に役立てていけるものとなったと思います。看護とは考えるほど奥深いものでそこに看護の楽しみがあるのだと思います。これからもたくさんの課題が出てくると思いますが、常に追求心、疑問意識を忘れずに看護への学びを深めていきたいと思います。

図書館から

平成12年の4月に大学が開学して以来、平成15年の2月末までに学外者の利用総計は平成12年度は634人、平成13年度は524人、平成14年度は1100人（平成15．2月現在）を超えている。（見学者除く）

つぎに利用者が県内どの地区から来ているか利用者の広がりを調べてみると、北は珠洲市や輪島市、南は加賀市までと県内各地から参集している。



平成13年の10月からは県内一般利用者・他大学・公共図書館に対しての貸出も可能になり、今年度10月には石川県公共図書館協議会とも正式に相互協力の締結を交わすなど、より一層の地域開放がすすめられた。

これを裏付けるものに利用者カードの発行があるが、現在270人を超える一般人の登録があった。また貸出冊数も、昨年度の10月から2月までの貸出数と今年度同期間の貸出数の比較では1.4倍の増加であった。

利用者の職業をみてみると利用者カードを作った人の60％が医療職で161人、一般が50人（18％）、学生60人（22％）となっている。また来客するお客様のほとんどが看護師の方である。しかも一般の方といっても町役場の社会福祉課に勤務とか老健施設に勤務といった方が多く、学生も総看をはじめとした看護学校の学生であり、 実際はほとんどが看護関係の方といっても良いようである。

このように利用者の職業が医療系に偏っていることもあり看護大図書館の利用者はリピーターが多い。例えば平成14年の11月から平成15年の2月までは以下のようになっている。

4ヶ月の合計では38.5％がリピーターであり、割合は極めて高いといえるのではないだろうか。図書館に来館して熱心に資料集めをしている姿が見受けられる。来館者の来館目的の調査はしたことがないので不明だが、来館はグループで見えることも多いので、看護研究のために看護大の図書館を利用していると思われる。

図書館一般入館者におけるリピーターの割合

	H14.11月	H14.12月	H15.1月	H15.2月	合　計
一般入館者数	172	64	48	72	356
リピーター	40	20	32	45	137
リピーター割合	23.3%	31.3%	66.7%	62.5%	38.5%

本学は設立当初より地域のすべての方への専門情報の集積・発信、さらに看護専門職に対する最新知識の集積・発信をめざしていたことから、当時の公立大学には珍しく学外者の利用が認められており、地域開放・大学開放といったサービスの面では進んでいたといえる。今後とも有用な情報の提供を心がけていきたいと思っている。

地域ケア総合センターから

地域ケア総合センターでは、本学教員による調査研究や指導助言事業も進めておりますが、ここでは一般県民の方々を対象とした講座や専門職を対象とした研修会に絞って御案内いたします。

■いきいき健康講座

生活習慣病の予防策のひとつとしていろいろな運動を紹介しながら、参加者に習慣的な運動の必要性を理解してもらう講座です。春・秋の2回（5週間、毎土曜日）開催し、大人気の講座です。

■健康＆リフレッシュ講座

13年度に引き続き開催された講座で、3回シリーズを今年度は2回開催しました。1回目は看護大学で。2回目は能登中部保健福祉センター（七尾）に会場をお借りして開催しました。

■看護・介護講演会

「死と癒し」をテーマに北里大学の名誉教授立川昭二先生をお招きし、講演会を開催。一般県民の方々、看護専門職の方々等231名の参加がありました。

■地域ケア総合センター公開講座

本年度から開始した講座で、本学の教員が主になって6月から7月にかけて開催。子どものことから死についてまで幅広い題材で講義を行いました。秋には新潟青陵大学の柳原清子先生に「その人を喪うとき－家族の哀しみを支える」をテーマに講演をいただきました。延べ345名の参加がありました。

この他、専門職向けに看護師等養成施設等職員研修、看護管理者研修、保健所技術職員研修、高齢者の看護・介護を考えるシンポジウム等が開催されました。

発行 石川県立看護大学広報委員会
〒929-1212　石川県河北郡高松町字中沼ツ7番1
TEL 076-281-8300　FAX 076-281-8319

R100
古紙配合率100％再生紙を使用しています